白地も赤く百円ライター

知花昌一・新・非国民事情

下嶋哲朗◉著

社会評論社

下嶋哲朗（しもじまてつろう）
1941年長野県生まれ。子どものためのノンフィクション作家。
著書：「ヨーンの道」（理論社）「星砂のくる道」（岩崎書店）「南風の吹く日」（童心社）「消えた沖縄女工」（未来社）など多数。
「ニッポンからの贈物」（講談社）で第5回「プレイボーイドギュメントファイル大賞」特別優秀作品賞。本書で「ノンフィクション朝日ジャーナル大賞」入賞。

白地も赤く百円ライター　知花昌一　新・非国民事情

1989年5月31日　初版第1刷発行

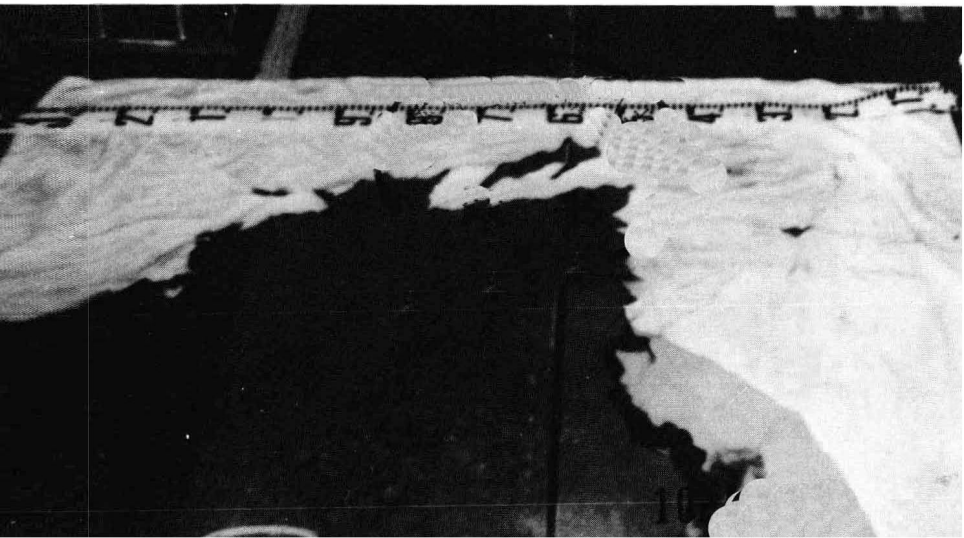
著　者＊下嶋哲朗
装　幀＊佐藤俊男
発行人＊松田健二
発行所＊株式会社社会評論社
東京都文京区本郷2-3-10　お茶の水ビル
☎03(814)3861　FAX.03(818)2808
郵便振替　東京7-89969
印　刷＊文昇堂　製本＊東和製本

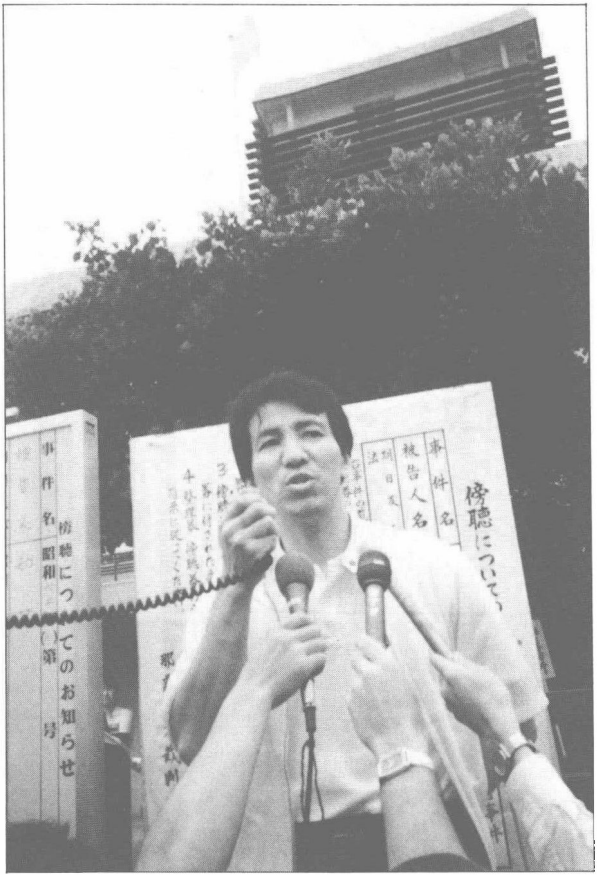
定価＝1545円（1500円＋税45円）
コード番号0030-89913-3351

白地も赤く百円ライター

知花昌一◎新・非国民事情

下嶋哲朗◎著





那覇地裁前で報告する知花昌一氏。

试

白地も赤く百円ライター

知花昌一◎新・非国民事情

もくじ

第Ⅰ章　やさしさちがい――7

第Ⅱ章　玉虫色の論理――73

第Ⅲ章　新・非国民――107

この国の人たち［あとがきにかえて］――187

写真提供――平和のための読谷村実行委員会

〝国体〟とは

一、国家体制の略（あるいは天皇への絶対従順を説き、個人主義、自由主義を排撃した国家体制）

二、国民体育大会の略

本文中の〝国体〟の解釈として、一あるいは二のいずれを選ぶかは読者の選択の自由である。

第Ⅰ章

やさしさちがい

「日の丸」変じて〝火の丸〟に

一九八七年十月二十六日、午前九時十七分頃、沖縄県読谷村（沖縄本島中部）。

沖縄〝国体〟男子ソフトボール試合会場の、スコアボードに翻る「日の丸」が燃え上がった。「日の丸」が〝火の丸〟になったのだ。この日雲は少なく快晴、気温は真夏を思わせた。「日の丸」は空気を揺り動かす陽炎となり、青い空へ昇っていった。

このとき、グラウンドでは、〝国体〟の開始式が晴れがましくとり行われていた。事件は電波に乗り、全国を一瞬のうちに駆け巡った。火の丸した男、知花昌一はたちまちにして有名人になった。

火の丸したことで自らの意思表示、思想心情の表現を果たし終えたとする知花昌一は、少しも悪びれることなく、現場のさわぎを尻目に悠々と立ち去り、同じ日検察庁に出頭して逮捕された。

昌一発の火の丸ニュースを東京にいて知ったぼくは、ぼくの三年間の空白を痛感した。

やがて風にのり「あれはみんなシモジマさんのせいだったんだネー」との、読谷村民のささやき声も聞こえはじめた。

読谷村をでんぐりかえらんばかりに騒がせた、火の丸事件にまつわる一連の事件の張本人はシモジマさんだ、というのだ。

なるほど、火の丸事件における〈潜在的首謀者〉は、ぼくだと言って言えないこともない……。

知花昌一そしてもう一人の逮捕者、知花盛康。実はこの二人ともぼくとは因縁浅からぬ仲であ

る。ぼくがいなければ昌一はいまも読谷村の期待される人間であり続けた、かもしれないし、モリヤスは二月には早くも本土へ向けてスイカを出荷し続けていた、かもしれない。そのように安定した人生設計を根底から覆すようなことをしでかしたのは、みんながみんなシモジマさんのせいではない、ぼくのせいではない、ということをぜひとも証明する必要を感じ、読谷村へ出かけて行った。

昌一に火の丸事件についてきいた。なぜやったのか、ということよりも、なぜ思い留まらなかったのか、をである。

「やめようと思って理由をつけたらいっぱいあるサー、いっぱい。

「新しい店の準備、オープンが間近になっている。商工会の副会長であるということ。小売り商工組合の理事長だし、仲間たちとショッピングセンターを作ろうというので、すでに六千万借りて土地を買ってある。『マルコポーロ』というスナックの経営者でもあったし。

「オレだって、やらない理由はいっぱいあるし、やりたいなんて、そういうものは何もないですよ。ボクの商売だって打撃うけてるわけだから。

「最初からそれはわかっていた。でも〝やるべき時にやらんといけない〟、そういう場面じゃないか。と、思ったんですよ」

知花昌一が「日の丸」を燃やし、告訴されたこの一九八七年は、沖縄が本土復帰してちょうど十五年という節目に当たっていた。「日の丸」焼却事件は本土と沖縄の十五年間の関係を、象徴

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

する出来事でもあった。事件を契機として十五年間積もり積もった沖縄の本土へのうっぷん、本土の沖縄への〈やさしさちがい〉〈おもいやりちがい〉への苛立ちが、一挙に噴出してきたのである。

右翼暴力団の報復

知花昌一はたった二百三十円で有名になった。旗のロープを切ったカッターが百三十円、プラス百円ライターである。(「日の丸」は村の財産)

火の丸事件は、つぎつぎ事件を呼ぶ。事件は独り歩きを始め、思いもかけない速さで膨張を続けたのである。

〝確信犯〟の昌一逮捕はありえたとしても、つづいて知花昌一の現場逮捕の妨げをしたとする友人、知花盛康の逮捕。そしてついに右翼、あるいは暴力団と目される一部団体による、報復暴力事件へとエスカレートする。

報復はまず知花昌一が経営する同村内のスーパーが、深夜放火された。続いてその六日後、買物客がいる白昼にもかかわらず、殴り込みをかけられ、賊の持つバール、ハンマーなどによって店内は滅多打ちに破壊される。報復はまだ終らない。

同村波平(なみひら)では沖縄戦のさなか、八十二名という村民の集団自決が発生したが、その追悼のシルシ『世代を結ぶ平和の像』がやはり右翼によって、木っ端微塵に破壊されたのである。

破壊された像の前には、「国旗燃ヤス村ニ平和ワ早スギル天誅下ス」と書かれたビラと、手書きの粗末な「日の丸」が、鉄製の鋭いモリにくくられ、地面に突き立てられていた。

この「日の丸」の扱いは暗く陰湿であり、陰険だ。

〝革新の星〟山内徳信村長による知花昌一告訴?!

しかしこれで終れば人の噂も七十五日、火の丸事件はうやむやのうちに忘れられ、昌一もいっときの有名人に過ぎなかったかもしれない。ところが現実とは奇怪そのものである。山内徳信読谷村村長の知花昌一告訴である。これで事件はこじれにこじれる。時間が過ぎて忘れ去られるどころではない、読谷村はいまも激しく揺れ動いているのである。

知花昌一と山内村長とは非常に深い関係にあった。革新の星と言われ、次期沖縄県知事選に打って出るのでは、と噂される山内村長は、元読谷高校の社会科の教師である。そして告訴された知花昌一はその優秀な教え子だった。しかも現山内革新村政の市民の側からの有力なブレーンなのであり、さらに山内村政の後を継ぐ人材としても一部から期待されてきた。火の丸した知花昌一とは、それほどの人物だということなのである。

復帰後読谷村ではこれまで一貫して公の場に「日の丸」を掲げたことはなく、「君が代」を流したこともない。圧倒的多数の読谷村民はこうした山内村長の姿勢を誇りとし、支持してきた。知花昌一を核とする『平和のための読谷村実行委員会』は、山内村長の選挙支持母体でもある。

ところが〝国体〟、そして復帰十五年目という節目に初めて「日の丸」が揚がった。読谷村政史上画期的ともいえるこの「日の丸」は、山内村政が〝国体〟という〝外圧〟に屈伏した屈辱のシンボルであり、村民にも同じ意味を持つシンボルだったともいえる。

しかし「日の丸」は揚げざるをえなかった。「揚げなければ〝国体〟の会場を変更する」との脅迫同様の通告がされたからだ。

「日の丸」を揚げたことで追い詰められた山内村長を救う道は、ただ一つだけあった。村民の誰かが、この「日の丸」を村民の意志において〝処置〟することである。それが知花昌一の火の丸だった。だから歓迎されこそすれ、告訴されるなどとは夢にも考えられることではなかった。村民感情も告訴は理解できる者とできない者とに二分した。

火の丸事件は読谷村の家庭の事情をかいま見せただけではなく、思いもかけず、「日の丸」の持つ闇の力、得体の知れぬ恐ろしさを見せつけたのである。「日の丸」を一枚焼くと、スーパーに放火され、殴り込みをかけられ、平和記念の像を破壊され、あげくの果ては逮捕され、裁判にかけられるのだ。

思い起こせば十三年前　――火の丸事件に火をつける

「帰ってきても仕事はないぞ」

さる高名な広告代理店のディレクターの、脅迫とも受け取れるような激励の言葉に送られて、

シモジマさん一家は東京を後にした。十四年前の九月のことである。八重山諸島石垣島へ移住したのであった。そのころのぼくはフリーのグラフィックデザイナーだった。けっこう名の通ったデザイン賞をいくつも受賞していたから、周囲は当然、生涯一デザイナーでやり通すだろうと期待した。

そのような思惑にはまったくかまうことなく、ぼくは東京の国鉄荻窪駅から、引っ越し荷物を発送した。送り先は「八重山竹富島駅留」。

国鉄職員は駅名一覧表と首っ引きになりながら「そんな駅はネーナー」といった。あるわけがない。竹富島は人口三百人あまりの小さな離島なのである。もちろん電車なぞはない。十分も歩けば島を縦断してしまう。電車どころか自動車だってない。百も承知だったが、なにしろ沖縄には知人もコネも何もない。そうやって荷物を発送するしか方法はないのだ。

竹富島へ移住しようという動機は、おそろしく、そして恥かしいほどにも単純なものだった。

ぼくと妻は旅行ガイドブックの美しいカラー写真に見惚れていた。かたわらには将来の貧乏人の子、二歳と四歳のわがいたいけな子が無邪気に戯れていた。デザイナーの収入は驚くほどよかった。ポスター一枚デザインすればひと月は食えた。しかし廃業と同時に無収入になったのである。

「これだな！」

「これね！」

ガイドブックの一ページ目、めくるめく青い空と海、真っ白な砂浜。二人で指さす写真が竹富島だった。

思い起こせば、これがそもそも今日の火の丸事件の始まりなのである。

ガイドブックのページをめくることもなく、したがって竹富島の美しいカラー写真と出合うこともなければ、「あれがすべての始まりだったんだねー、シモジマさん……」などと恨めし気に言われることもなかった。

沖縄へ移住した一九七五年七月、沖縄では国際海洋博があった。この時、『川は流れる』という大ヒット曲を歌った沖縄出身の歌手、仲宗根美樹が出資した土産物店は本土資本の攻勢に会い、あえなくつぶれ、破産。海洋博に合わせて沖縄へ来た皇太子夫妻は『ひめゆりの塔』の前で、火炎ビンを投げられた。が、シモジマさん一家はこのようなことには一切関心なく、飛行機が那覇へ着くと空港の外へ一歩も踏み出さず、そのまま南西航空に乗り替え、竹富島へ向かったのである。これが一家の沖縄初体験である。

沖縄にも「日の丸」があふれた日が……

その三年前、一九七二年五月十五日、沖縄は本土へ復帰している。

復帰運動では知花昌一は「日の丸」を先頭に、闘う学生だった。復帰すればその日から基地は撤去され、日本一の貧乏県から解放され、アメリカ軍からいいように踏みにじられてきた人権も

回復し、本土へ渡るにも、もうパスポートは必要なくなる……。これらはいわば〈復帰ドリーム〉であった。ドリームのシンボルとして「日の丸」があった。今は焼旗の島沖縄に、信じられないことだが「日の丸」があふれたのである。ところがいざ復帰してみると、実現したドリームはパスポートの廃止ただ一点のみと言えるほどのものだった。昌一のみならず全沖縄人の復帰ドリームは、ヤマトの政府とアメリカの政府によってみごとに裏切られたのである。

それいらい「日の丸」は沖縄から姿を消した。昌一は現実政治に幻滅し、逮捕され、大学を止めた。沖縄の人々は「日の丸」は「国旗」である、と単純につなげる大和人（ヤマトンチュー）を到底理解しがたいのである。

シモジマさん一家の石垣島暮らし

さてシモジマさん一家は竹富島を目指したものの、結局住んだところは石垣島の川平（かびら）と言う小さな部落だった。竹富島を島の言葉でシキタブンというが、伏せたおぼん、という意味である。島はその言葉通り平らである。

山も丘もない。一番高いところは小学校の体育館の赤い屋根、というくらいなのである。それは山国信州で育ったぼくには信じられないような風景であり、到底住めないと即断し、川平に決めた。川平は一方は見事に美しい海に向かって開けており、三方は低いけれども山に囲まれていた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com